



## いろいろなご意見があることがわかりました

阿江通良

体育科学系教授

前号(57)の「大学の語学教育を考える」を読むと、語学教育はわが体育専門学群のみでなく、ほとんどの学群が抱える重要な問題であることが伺われ、共感したり、安心したり、感心したり、少し反発を覚えたりした。

以前に学会でオランダに滞在したとき、巧拙は別として、非常に多くの人が英語を話すことを知って驚いた。聞いてみると、そうしなければ生きていけないとのことであった。これからの日本人には、極一部を除けば、外国語、特に英語が不可欠になることは明らかであり、語学教育が極めて重要なことは本学の構成員であれば、恐らく誰もが認識していることであろう。フォーラムの記事で印象に残ったのは、田中先生の「だめ語学教育の再生処方」、市村先生の「インターネットと金融自由化が変えた英語の環境」、Barfield先生の「そして今、変革の時」、Vernon-Edo先生の「The Teaching of Medical English in the

School of Medicine]であった。特に Barfield 先生の語彙増強に関すること、先生自身の授業実践例に関すること、そして結論は傾聴に値すると思われた。このように印象に残った記事から考えると、私自身の語学教育に対する思いは、「取りあえず、英語の実用的な運用能力の強化が重要で、そのための具体的な計画をたて、果敢に実行するしかない」ということである。ここで日本人らしさを必要以上に発揮して「総論賛成。各論反対」とならないことを祈る次第である。

学会に出席している英語を母国語としない研究者諸氏に聞いてみると、「日本の研究者や学生にとっては、あとは英語を使う経験だけです」というのが多くの共通する答えである。このことは、日本のスポーツと同様に、本学の学生、院生、教職員にも当てはまることでもあると思われる。しかし、「国際人とは他の国の人に尊敬されるものを持つことである」と教えてくださった恩師の言葉もそれとともに強く思い出されるのである。

(あえみちよし スポーツバイオメカニクス)